

P2-051

重症心身障害児者施設における行事食についてのアンケートと、咀嚼嚥下障害児者にもやさしい行事食の一形態  
—ユニバーサルデザインフードを目指して—

太田 雪子<sup>1,2</sup>、太田 雪菜<sup>2</sup>、野村 俊明<sup>3</sup>

<sup>1</sup>東葛医療福祉センター 光陽園、  
<sup>2</sup>おた研究室、  
<sup>3</sup>日本医科大学医療心理学教室

【はじめに】

地域性はあるものの、正月の雑煮、ひな祭りのちらしずし、クリスマスの鶏肉・七面鳥料理などのいわゆる行事食には、子どもたちの成長や家族の健康・長寿を祝うという意味合いが込められており、食べて楽しむだけの単なる食事とは言えない。これは重症心身障害児者とその家族にとっても同じであり、その楽しさと意味合いに何のちがいもない。そこで今回、重症心身障害児者施設に働く職員に対して行事食についてのアンケートを行った。更に、見た目や味をほぼ常食と同じに保ち、常食を食べる家族とも一緒に楽しめる咀嚼嚥下障害児者にもやさしい行事食を試作した。

【方法】

調査期間は2016年1月20日から28日。対象は研究の目的に同意した職員30名。職種は看護師13名、生活支援員7名、保育士2名、薬剤師2名、理学・作業療法士3名、医師1名、社会福祉士2名であった。管理栄養士や調理師など、直接調理に携わる職種の職員は除外した。アンケートの内容は、A. 行事食の広告をコンビニやスーパーのチラシやポスターで見たときに食べたいと思ったことがあるか、B. 行事食を大切な人と一緒に食べたい、または大切な人には食べさせたいと思ったことがあるか、C. 障害の程度に応じた様々な食形態の行事食の安くて簡単な作り方があったらその調理方法を知りたいと思うか、の3点。医師が一度に職員数名ずつに対して質問紙を読み上げ、5分程度の対面インタビューを行った。

【結果】

広告を見て食べたいと思ったことがあると答えた人数は27名、大切な人と一緒に食べたい、または大切な人には食べさせたいと思ったことがあると答えた人数は29名、様々な食形態の行事食の安くて簡単な作り方があったらその方法を知りたいと思うと答えた人数は27名であった。

【考察】

行事食に対する広告の影響は大きく、安くて簡単な作り方があったらその方法を知りたいと思う人が大半で、その結果、行事食は大切な人と一緒に食べたい、または大切な人には食べさせたい食事の一つと考えられた。行事食は、現在の日本においても今なお引き継がれている食文化の一つである。また、行事食は外食とは異なり家庭の中で少数者を対象に作られ、食べられる食事である。一人ひとりの障害の程度に応じた食形態を工夫することは、家庭の中でも十分可能である。咀嚼嚥下障害児者も家族と一緒に行事食を楽しめるよう、各種食形態の家庭向き調理方法の研究が必要である。

P2-052

幼児に対する口腔体操の効果（1）  
—口腔体操介入前の幼児の食習慣と脳血流測定結果

橋本 由利子

東京福祉大学 社会福祉学部

【目的】

幼児期は食べる機能の発達段階でもあり生活習慣の基礎をつくる時期でもある。この時期にしっかり噛んで食物を摂取する習慣を定着させることは幼児の身体発達ばかりでなく脳の発達や社会的発達にも良い影響を及ぼすといわれている。筆者らは口腔体操により幼児の口腔機能や噛む意欲が向上するのではないかと考え幼児口腔体操を考案している。NIRS (Near Infrared Spectroscopy、近赤外光脳機能測定装置)を用いて脳の血流動態を調べる研究はさまざまな健康科学の分野で応用されている。筆者らは幼児が硬い食物を摂取した場合、脳の前頭前野の活動量は一時的には増加するが、口腔体操などの介入により徐々に噛む力が強くなった場合には、硬い食物を摂取しても血流量の急激な増加は抑えられるのではないかと仮説を立てている。この研究では幼児の口腔体操介入前の調査として行った幼児の食習慣と脳血流の測定結果について、介入後の測定結果と比較する際に留意する点などを中心に検討した。

【方法】

調査対象は私立保育所の4歳児とした。食習慣については硬い食物を食べる時の様子など7項目を幼児の保護者に対する自記式アンケートで実施した。脳血流量の測定は保育所の一室を借りて行った。咀嚼力判定ガム1/2枚を40秒間噛んだ時の幼児の前頭前野の酸素ヘモグロビンの変化を観察した。これらの調査を行う前に、研究の意義、測定はいつでも中止できること、個人が特定できるような結果の公表はしないこと等を文書と口頭で保護者及び施設責任者に説明し、文書で同意を得た。

【結果】

ガムを噛んだ時の酸素ヘモグロビンは安静時と比較して増加している幼児も減少している幼児もいた。そのパターンは増減が激しいものも、緩やかな動きを見せるものもあった。アンケート調査で硬いものを喜んで食べると答えた幼児は酸素ヘモグロビンの動きは緩やかな場合が多かった。ガムを始めて噛んだ幼児は酸素ヘモグロビンが増加している場合が多く、また増減の激しいパターンを示す場合もあった。

【考察】

前頭前野の脳血流量は測定時の脳の活動を示すため、測定環境や測定時の心の状態などさまざまな要因に左右される。今回の測定ではそれらの要因をなるべく排除するような配慮を行ったがそれでも個々の幼児の食物体験などにも左右されることが分かった。介入後の調査では、それらの点を踏まえて変化を見ていきたい。